

実習生の客観的な観察力を重視した日本語教育実習

木戸 光子 君村 千尋

要 旨

本稿では、大学院博士前期課程の日本語教育コースで筆者が行っている教育実習の概要を報告し、教育実習において実習生が授業活動を客観的に観察することの重要性を述べる。日本語教師養成プログラムにおいて教育実習は、教育に関する知識や技術を実践するのに必要とされる。授業で行った実践を踏まえてさらに実践を重ねるにあたり、実習生は様々な面で客観的に授業を捉えるようになれば、次の授業でさらに自己の授業をよくすることができる。実習ではブログやビデオを用い、ミーティングや授業リハーサルを行うことによって観察力を高める工夫を行った。本報告を通して、教育実習は恒常的な教師の成長を促進するように設計されるべきで、実習生の客観的な観察力が教師としての自律学習に重要であることを主張する。

【キーワード】 教育実習 観察力 ブログ ミーティング 知見の共有

Japanese Language Teacher Training Focused on an Ability of Objective Observation

KIDO Mitsuko, KIMIMURA Chihiro

[Abstract] In this paper, we report an overview of the teacher training in the Japanese language education course of the master's program, and note the importance of observing objectively class activities in the teaching practicum. Teacher training requires practice of both educational knowledge and skills. If the trainee students objectively grasp lessons in various aspects, they can further improve their classes in the next lesson. In the practical training, we aimed to improve the content and teaching skills by using blogs, videos, meetings, and class rehearsals. Through this report, we suggest that teaching practice should be designed to encourage permanent teacher growth, and that the ability to observe objectively is important for autonomous learning as a teacher.

[Keywords] Teacher training Observation Blog Meeting Sharing of knowledge

1. はじめに

日本語教師養成プログラムにおいて、教育実習は重要な役割を果たしている。日本語教育に関する教育内容や知識を実習の場で実践し、その実践を通して教授技術を身につけ、授業運営を体験する。

本稿では、人文社会科学部国際日本研究専攻日本語教育学学位プログラム前期課程の科目「日本語教育実践研究Ⅰ」という日本語教育の前期課程（修士）1年次の教育実習について、実習生を指導する教師の立場から、平成19年度より行っている大学院の教育実習の方針や方法を概観する。この実習では実習生に客観的に授業をとらえる観察力を養うことを主眼としている。一方、この実習に参加した実習生の立場から、実習はどのようにとらえられていたのかも検討する。実習生は実習の方針を踏まえながらも、実習生独自の視点から授業内容や授業方法に創意工夫を行っており、それぞれの実習生には学びの多様性が見られる。実習の具体例として、実習生の立場から、平成27年度秋学期に行った「日本語教育実践研究Ⅰ」の教育実習¹について報告し、加えて過去の実習生の報告の中から実習方針を踏まえつつ実習生自身の創意工夫をとりいれて授業を行った例も紹介する²。

2. 教育実習のねらいと概要

2.1 授業参加型の教育実習

筑波大学大学院人文社会科学部国際日本研究専攻前期課程の日本語教育コースでは、コース所属の大学院生は、日本語教師養成プログラムの修了要件として、2つの教育実習関係の科目が必修となっている。1年次にとる「日本語教育実践研究Ⅰ」という科目は授業参加型の実習で、本学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育部門で開講されている留学生対象の日本語コースの授業内で行われ、実習生は指導教員の指導の下に授業活動に参加する。一方、2年次にとる「日本語教育実践研究Ⅱ」は、いわゆるプロジェクト立ち上げ型の実習で、初級日本語コースを立ち上げ、実習指導教員の指導を受けながら、受講生募集から授業活動まで授業全般を実習生自らが運営するものである。

授業参加型の教育実習は、教育機関でカリキュラムの一環として行われ、既存の授業の中で実習をする。授業参加型の実習の利点は教育機関のカリキュラムの中で指導教員とともに教育実践に関わって教育現場を実感できることである。つまり、プロジェクト立ち上げ型の教育実習とは異なり、授業参加型の実習では、実際に教育機関のカリキュラムの一環として行われる授業の中で、実際に教育現場を教師側の一員として体験できる。実際に教えながら教育に必要な知識や技能を身につけることが期待される。一方、プロジェクト立ち上げ型の教育実習は、実習のためにデザインされた授業で、あらかじめ

め実習のために授業が設定された中で実習を行う。プロジェクト立ち上げ型の実習の利点の一つは授業運営全般に関わることで、授業内外で必要な知識や技能も含めて授業デザインを学べることである。

本稿で取り上げる1年次の教育実習「日本語教育実践研究Ⅰ」は、授業参加型の教育実習であり、本学で実施されるレベル別・技能別の多岐にわたるコースから授業を選択できる。1つの授業に学期を通して参加し、指導教員の授業補助や授業見学を行い、教壇実習や教材作成などについて教育実践を通して教授技術を学ぶ場である。実習の方針や内容などの詳細は指導教員によって決められる。

2.2 教育実習の概要

平成27年度(2015)の教育実習のシラバスを図1に示す。平成19年度(2007)より行ってきた筆者の実習授業は、実習生の希望に応じて日本語レベルや目標とする技能は授業ごとに異なるものの、実習の方針と方法はほぼ同じである。

日本語教育実践研究Ⅰ 2015年度秋学期

1. 実習期間：2015年10月2日～2016年2月9日
授業名・日時・場所：
「補講書く J850B 上級作文」金4限(13:45-15:00)
大学会館 C 棟 9P201 (旧留学生センター 研修室 D)
2. 実習内容
 - (1) 授業見学および授業記録
目的：客観的に授業を記録して、観察力を養う
授業記録はブログにアップロードする。実習期間のみ公開する。
授業開始から終了まで時系列に沿って詳細な記録をとる。コメントも記入する。
プライバシー保護のため受講者名は固有名詞を用いないこと。
参考：blog 文章表現 <http://d.hatena.ne.jp/kdmtk99/20090417/p1>
 - (2) 授業補助
授業準備や実施時に補助作業を行う。採点や添削も含む。
 - (3) 実習授業
1コマ全部75分、または授業の一部。具体的内容は相談の上、決める。
 - (4) 実習の流れ
 - ① 教案作成
 - ② リハーサル ←ビデオ録画して自己チェック
 - ③ 授業の実施 ←受講者の了解を得てビデオ録画

3.	ミーティング (約 15 分)	週 1 回、授業記録の検討。
	曜日 時 分	
4.	実習レポート	
	実習に関するレポートを作成する。2 ページ。過去の実習報告集を参照すること。 締切 2016 年 2 月 16 日 (火)	
5.	成績	
	<u>授業記録、ミーティング、実習準備、実習授業、実習レポート</u> によって、総合的に評価する。	

図 1 平成 27(2015)年度の教育実習シラバス (木戸担当)

以上のシラバスに従って、実習生は 1 回または 2 回の教壇実習を行うとともに、毎回授業を見学し、必要に応じて授業の補助をする。

2.3 客観的な観察力を重視した教育実習

筆者の担当する教育実習では、実習生が授業活動に参加するにあたり、実習生に求められる資質の一つとして対象を客観的に観察する力を重視している。教育実習をきっかけに今後も授業を行う上で、教師として自律して成長していくには、教師、学習者、学習内容、学習環境の状況を的確に観察しなければならない。例えば、企業経営で主に用いられ、教育実践でもしばしば論じられる PDCA サイクル、すなわち、「Plan (計画) → Do (実行) → Check (評価) → Act (改善)」という 4 つの段階を繰り返して学習を促すことは自立かつ自律した教師となるトレーニングとしても必要なサイクルである。しかし、計画・実行・評価・改善するには、その対象を客観的に観察する力がなければ何をどう計画し、実行の価値あるものを選び、何を評価し、何を改善すべきなのかが把握できない。そのため、教育実習の中で客観的な観察力を実習生が身につけるための工夫が必要となる。

そこで、実習では、客観的な観察力を養うために、以下の 3 つを行っている。この 3 つの活動は、初級、中級、上級などレベル別の授業、作文など技能別の授業であっても共通の活動として実施している。このような一貫した方針と内容によって実習生が客観的な観察力を養えるようにしている。

(1) 時系列に記述した授業の見学記録をブログに公開する

実習生の観察を重視するため、ブログによる授業観察記録を時系列で記入してもらった。時系列で詳細な記録をとることにより、毎回の授業の流れを把握し、教師や学習者

の視点から授業活動を把握し、毎回の授業活動の効果と問題点を検討する。毎回の授業では、実習生は教師に近い場所や学習者の中など、教室で座る位置を変えてみることを勧めている。視点を変えることにより、授業活動が様々な位置からどのように見えるかを観察できる。

(2) 毎週ミーティングを行って授業内容を批判的に検討する

授業に関する意見交換および情報共有のために、毎週指導教員と実習生とでミーティングを行った。ミーティングでは、授業観察記録を補完する形で、授業活動や学習者に関してより踏み込んだ検討ができる。授業観察記録ブログを踏まえながら、実習生と教師は各回の授業における問題点とその対策を共有する。作文学習全般に通じる知識や個々の学習者の作文力などに関して質問し、意見交換をする。例えば、学習者の誤用が個人の問題なのか、全般的な傾向なのかなど、授業観察記録だけでは明らかにできない誤用の要因を考察する。また、授業活動での説明や作業が効果的だったかどうかなど活動自体の成否も検討する。

(3) 教壇実習前に教案に従って教室で授業のリハーサルを行う

授業前の準備段階で教案を作成し、実際に再現して検討するため、授業のリハーサルを教室で行う。教案どおりに授業活動を行ってみると、教具や板書の問題、実習生の説明の口調や態度など、教授活動を様々な面から具体的にとらえ直すことができる。必要に応じて教案や教材、教具を作り直し、さらにリハーサルを行う。考えたことが実際に実行できるかどうかを検討し改善していく。授業のリハーサルでは、教壇実習と同じくビデオ撮影も行う。実習生はビデオを通して自分の授業活動の様子を把握し、改善すべき点を検討する。

3. 実習生から見た平成 27 年度 (2015) 教育実習

本章では、実習生の立場から、2015 年度秋学期に「補講書く J850B 上級作文」のクラスにおいて行われた教育実習について報告する。本クラスの授業概要は以下のとおりである。

3.1 授業概要

実習授業の期間と目標と内容は以下の表 1 のとおりである。

表1 実習授業の期間・目標・内容

授業期間	2015年10月2日～2016年2月5日(週に1コマ/全15回)
授業目標	<ul style="list-style-type: none"> ・社会的、文化的なテーマについて3000字程度の論理的なレポートが書ける。 ・事実と意見を書き分け、評価や主張のある結論が書ける。 ・制度、仕組みなどについて客観的に説明でき、新聞記事などの要約ができる。
授業内容	<p>毎週、宿題作文の提出とテキストの予習が前提となっている。毎回の授業の流れは以下のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 前回の授業で書いた要約作文のフィードバックを行う。 ② 要約作文。(15分間で「ニュース日本語版」の新聞記事を150字にまとめる) ③ 宿題作文の全体フィードバック。 ④ 必要に応じてプリント教材を活用し、文法や表現の補足を行う。 ⑤ ピア学習。2、3名のグループで互いの宿題作文をコメントし合う。 ⑥ 次回授業内容の予告、宿題作文の説明などを行う。

3.2 実習内容

教育実習の活動には、主に授業見学と教壇実習が挙げられる。本実習では、コース開始からまずは数週間、クラス内外の補佐を行いながら授業を見学し、授業の流れを把握した後、教壇実習に臨んだ。それぞれの詳しい内容を下記に記す。



図2 実習授業の1週間のサイクル

(1) 授業見学・授業補助

授業開始前に印刷などの授業準備や授業中のプリント配布等の補助を行った。授業中は教室後方からクラスを観察し、授業の流れ、学習者の反応、教師と学習者のインタラ

クション等を記録した。また、必要に応じてピア活動に加わることで、学習者から直接質問を受け、学習上の困難点などを知ることができた。中には、即座に回答しかねる表現の違いに関する質問などもあり、作文指導の難しさを痛感した。

(2) 授業記録

授業見学後、観察した授業内容を時系列に沿ってブログに記録した。本クラスは学生の活発なアクションがあまり見られず、記録は教師の指導や授業内容に関する事柄が中心となった。授業開始から終了までを順に書いていく作業により、授業を追体験し、記憶に深くとどめることができた。また、こうした授業の振り返りは、より客観的な状況把握に役立った。

(3) ミーティング

授業記録ブログ、学習者から提出された宿題等を確認しながら、学習やクラス運営における問題点について指導教員と話し合う。このミーティングにより、学習者に頻繁に見られる文法・表現上の誤りを認識し、それらに対する指導として何が必要とされるかを考える機会を得た。「書く」指導についてより深く学ぶことができた。

(4) 教壇実習

教壇実習の一連の流れを図3に示す。

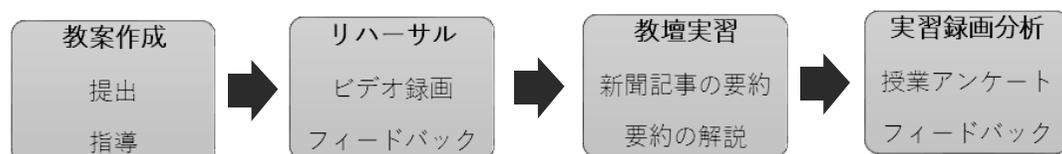


図3 教壇実習の流れ

(5) 教案作成

教壇実習では、「ニュース日本語版」の新聞記事を150字に縮約する要約の指導を行った。この要約指導は、まず授業内に要約を実施し(15分間)、次回の授業でその要約作文のフィードバックを行うという性質上、実習が2週にわたる。したがって、教案も2週分(要約を指示する1週目とフィードバックを行う2週目)を作成し、指導を受けた。クラス20人分の要約を添削し、それらをタイプ別に分けて模範例を選ぶ作業はかなりの時間を要したが、学習者の様々な創意工夫がみられる要約作文は興味深いものであった。

(6) リハーサル

リハーサルは、学習者が授業を受けていると仮定して教壇で授業を行い、その様子を

録画した。その模擬授業に対する指導教員のコメントは教授方法のみならず、声の大きさ、体の向き、視線においてまで多岐にわたった。また、録画を確認することで、自身の教え方、話し方を客観的に観察でき、本番に向けて大変有意義な練習になった。

(7) 教壇実習

本番では、もっと柔軟性のある授業にしたかったのだが、終始緊張してしまい結局教案に忠実な硬い授業になってしまった。学習者から記事の中の似通った表現の違いについて問われ、若干回答に戸惑った不安感が学習者に伝わってしまったが、大きな混乱はなく予定通り要約の解説を終えることができた。

(8) 実習録画分析

録画を見ると、教案を読んでいるような話し方が観察された。実習の指導教員のフィードバックにも、「ライブ感がない」との指摘があり、目の前の学習者に対してもっと語りかけるような接し方・話し方が今後の課題といえる。また、学習者にとって関心が高いのは、類義語の使い分けや形式の似通った表現の意味の違いなどについての解説であることも分かった。教案では、学習者からの質問を予め想定して例文を用意しておくなどの準備が必須であると感じた。実習後に実施した授業アンケートから、声の大きさや板書の文字の大きさは適切であったか、説明は分かりやすかったかなどについて、学習者側からの意見をきくことができた。

3.3 利点および改善点

最後に、本実習の利点と改善点についてまとめる。

利点として第一に、リハーサル時におけるビデオ撮影が挙げられる。実習本番の録画だけでなく、リハーサルの撮影も行うことで自らの話し方、立ち位置、体の向きまでも客観的に把握することができ、本番に向けて修正することができた。また、毎週指導教員とミーティングを行うことで、クラス運営における問題点を共有することができ、そのための対策や指導方法の変更等について細かく確認できたという点は学びが多く、有益であった。

一方で、改善が期待されるのは、教壇実習において指導教員の指導法をそっくりなぞらえてしまい、自らの創意工夫が発揮できなかったという点である。「書く」授業は、会話の授業と異なり、教師からの一方向の指導や説明が多くなりがちである。そこで、学生の主体的な取り組みを引き出すためにも、なるべく双方向の授業にしたいと考えていたが、実際に教案を立ててみると、長く観察していた授業形式の枠から出ることが難しかった。実習生は経験が未熟なため、まずは模倣から入るのも一つの手段といえるが、

授業見学から得た知識をふまえ、プラス教室外で吸収したことも取り入れてみる価値もあるのではないかと考える。今後の課題としたい。

4. 実習授業における実習生の創意工夫

実習生の立場から教育実習を報告した3章では、客観的な観察力を養うという目的は達成されたことがうかがえる。実習生は自分自身の授業活動を内省するだけでなく、授業見学を通して指導教員や学習者の活動や授業全体の流れや授業内容なども客観的に観察している。授業見学、授業記録、ミーティング、リハーサル、実習録画分析と様々な活動を通して総合的に客観的な観察力が向上する様子が実習生の報告から見られる。

一方、実習授業では教師の授業方式に従うのみで自らの創意工夫ができなかったという主体性の欠如の問題も挙げられている。確かに、この授業では実習生が3章で指摘したように「教師からの一方向の指導や説明が多くなりがち」であり、「学生の主体的な取り組みを引き出す」ためには「双方向の授業」が求められる。

そこで、本章では過去の教育実習生の実習報告の中から、実習生の創意工夫が見られた例を挙げる。いずれの例も「補講書く J953 上級作文」³における教育実習である。

長戸・林(2009)は平成20年度(2008)の教育実習において、授業内容の再検討を行い、2人の実習生の立場の違いを指摘している。実習生の1人は教授経験があるものの上級レベルの作文指導は初めてということで、内容を重視することが学習者の動機付けにつながるとしている。もう1人は過去に同じ授業に学習者として受講し、その後、実習生として参加し、学習者と教師の両方の立場を経験している。その知見から、学習者が求めているものは単なる正確さではなく、「流暢さ」であるとしている。すなわち、この「流暢さ」は「単にすらすらと話せることではなく、日本人の慣習、社会、文化の理解を通して達することが可能になる領域」だという。書く能力の養成において、「学習者の日本の社会・文化に関する理解を深めたい」という要望に応えることも重要だということである。このような実習生自身の教授体験や学習体験を踏まえて、教育実習を通してさらに授業活動への理解を深めていき、実習にもそのような知見を活かしている。

坂口(2011a, b)は平成22年度(2010)の教育実習において、意見を含む解説記事の要約を取り上げている。授業で毎行行われている事実報道記事の要約が必ずしもレポート作成に直接関係しないことを看破し、よりレポート作成に近い作文技術を学習できるように、意見を含む解説記事を要約することにした。その意図は学習者にも伝わり、解説記事の要約練習が学習効果を高める可能性を示唆している。この実習も指導教員の授業内容を批判的に検討し、授業改善の方向性を示したという点で優れた実習授業であった。

山田(2012)は平成23年度(2011)の教育実習において要約文の類型化に基づく要約を提案し、この類型化によって実習授業でも学習者が要約しやすくする工夫を行った。要

約文を2つに類型化し、タイプ1が冒頭段落の記事全体の概要とその後の段落の詳述や具体例などをまとめるものなのに対し、タイプ2は各段落全体で記事の概要を述べているとしている。これは指導教員の授業内容の批判的検討から要約技術に踏み込んで、実習授業で学習者がより効果的に記事要約を行えるように工夫した例である。

吉(2013)は平成24年度(2012)の教育実習において、学習者の相互活動と学習プロセスを重視し、ピア・レスポンスを取り入れた授業活動を行っている。授業では冒頭15分に毎回記事要約を行っているが、教師主導のフィードバックが学習者に完全に理解されていないのではないかという反省から、学習者同士のコミュニケーションからお互いの要約文をよりよいものにしていくというピア活動を行った。授業後の学習者アンケートの評価からピア活動に好意的な評価がえられたという。実習生の授業観察から授業の批判的検討を経て、ピア・レスポンスというプロセス重視の学習活動を実習授業で行った点は高く評価できる。教育実習は単に指導教員の授業方法の模倣ではなく、さらにより学習効果の高い授業活動を目指すこともできる。

以上挙げた例はいずれも、実習生が授業見学を通して、実習生の立場、授業方法、授業内容という面から指導教員の授業を批判的に検討し、実習授業でさらなる改善を試みたものである。教育実習は、実習生自身が自己モニターをするだけでなく、実習に入った授業の批判的な検討を通して、単なる模倣ではない自分自身の教師としての成長を促すような授業活動の創意工夫を試みる場でもある。客観的な授業観察では、授業活動、教師、学習者といった授業の場や授業の構成員を含めて複合的な観察力を養うことが重要である。

5. 終わりに

以上、本学大学院博士前期課程の日本語教育学学位プログラムで筆者が行っている教育実習の概要を報告し、教育実習例を紹介した。このような教育実習において実習生が授業を客観的に観察することの重要性を指摘した。実習生が今後新しい内容や新たな方法で授業を行う必要性があっても、客観的な観察力があれば、その観察に基づいて自己の授業をよくすることができるだろう。将来、教育の場で実践を積み重ねていくにあたり、客観的な観察力に基づいて、教師として恒常的な成長を促進できると考える。

注

1. 筑波大学の日本語教師養成プログラムは、当初は地域研究研究科においてプロジェクト立ち上げ型の初級対象の教育実習を必修科目として修士課程2年次に行っていた。その後、平成21年度(2009)より人文社会科学研究科国際地域研究専攻に改組され、博士前期課程2年次に行う従来のプロジェクト立ち上げ型の教育実習

に加えて、1年次に留学生センター（当時）の日本語コースの授業における授業参加型の教育実習も必修となった。さらに、平成27年度(2015)より人文社会科学研究科国際日本研究専攻に改組され、引き続き、博士前期課程1年次にグローバルコミュニケーション教育センター（旧留学生センター）開講の日本語コースの授業における授業参加型の教育実習「日本語教育実践研究Ⅰ」、および、2年次にプロジェクト立ち上げ型の教育実習「日本語教育実践研究Ⅱ」を行っている。

2. 本稿は、1・2・4・5章は実習指導教員の木戸、3章の2015年度教育実習報告は教育実習生の君村が執筆した。
3. 4章の「補講 J953 上級作文」と3章の2015年度「補講 J850B 上級作文」は、どちらの授業も日本語能力試験 N1 級相当の学習者を対象としており、日本語レベルもほぼ同じで、3000 ページ程度のレポート作成を目標としている。ただし、学期の長さとしてレベル編成が異なっており、前者は3学期制、1学期10週完結で週1回75分授業、9レベル編成であるのに対し、後者は2学期制、1学期15週完結で週1回75分授業、8レベル編成である。

参考文献

- 吉陽（2013）「日本語上級 J953 クラスにおける実習報告」『日本語教育実践研究論文集 平成 24 年度』筑波大学大学院人文社会科学研究科国際地域研究専攻：21-22
- 坂口清香（2011a）「上級日本語作文の授業における解説記事の有用性－新聞記事の要約練習－」『日本語教育実践研究論文集 平成 22 年度』筑波大学大学院人文社会科学研究科国際地域研究専攻：67-76
- 坂口清香（2011b）「日本語上級書く J953 クラスにおける実習報告」『日本語教育実践研究論文集 平成 22 年度』筑波大学大学院人文社会科学研究科国際地域研究専攻：27-28
- 長戸三成子・林始恩（2009）「日本語上級クラス『書く』の実習報告」『日本語教育実習報告論文集 平成 20 年度』筑波大学大学院地域研究研究科：11-19
- 山田野絵（2012）「日本語上級 J953 クラスにおける実習報告」『日本語教育実践研究論文集 平成 23 年度』筑波大学大学院人文社会科学研究科国際地域研究専攻：35-36